

令和5年度第3回小田原城天守等復元的整備検討会議 議事録

- 1 日 時 令和5年10月10日（火） 9時30分から11時30分まで
- 2 場 所 小田原市役所 3階 301会議室
- 3 出席者 鈴木委員、古川委員、櫻井委員、辻村委員、岩越委員、
岡委員、湯浅委員、小林委員、大島委員、伊藤委員

【開会あいさつ】

【資料の確認】

【会議公開の確認】

議事

1 審議事項 （1）天守の建替に係る検討項目について

鈴木委員：今日の議題を明文化しておいた方がいいと思っている。大きくは3つある。1つ目は、全体シナリオを一度きちんと見える化すること。2つ目は、木造なのか延命かという1つの判断材料をどういう段取りでなるべく早くきちんとすること。3つ目は、これからの東博模型も含めての調査の段取りを具体的に日程イメージを持ちたいということである。

櫻井委員：そうしたら、今、3つの大きな議論したいテーマが出たが、まず初めに、模型の調査のスケジュールの詳細の部分について、進捗があれば共有してもらいたい。

湯浅委員：必要な経費については、来年度の予算要求はしてある。確保に向けて、特に移動に関わる経費については、予算要求をしているところだ。今後必要となる作業は、県博がいつから休館になるかということだろうと思っている。県博も、予算要求しているところだと思っている。県博が、来年度休館予定があるということで、その中で調査をしようという話にはなっている。合わせて、実際の所有者である東博との調整をそろそろしたいと思っているので、まずは県博とすり合わせをした上で、東博の方にとっていきたいと考えているところである。調査の詳細については、宮本委員がどのような調査やられるかということにもかかってくると思う。現場に行く人間で考えてもらいたいと考えている。

櫻井委員：私の記憶が定かではないが、模型を調査するにあたって、差し金を当てて、いい悪いとかそういう議論があったと思うが、具体的な調査方法について、どの段階でどのように詰めていく予定になっているのか。

湯浅委員：まずは、調査ができるかできないかというところが問題である。もちろん、差し金の話とかはしてあるので、直接、宮本委員を県博に連れていく。

岡 委員：どういう風な形で計測ができるかということでのやり方だとは思う。また、県博の判断だけでは許可が出せないなので、まずは県博の条件をクリアして、ということには

なる。基本的には、模型自体を痛めないような細心の注意を払ってやるというところの中で、ご理解いただく。過去、天守に収蔵されてる模型については、調査がされていて、そこで踏まえた内容を基本的には援用しながらになると思うので、よっぽど違うやり方を考えているということであれば、そこはまた、相談が必要になると思う。県博の方も、小田原市は実績があるので、ある程度の範疇では大丈夫だろうというような認識でいてくれて、また、その前提で東博ともどういう風に交渉したらいいかという話もし始めてるところである。

櫻井委員：そうすると、その調査に関しては、こちらから依頼しているのは、模型の周りの目視による調査ではなくて、他の2基をやったような同類の調査をやるということを前提に、模型をケースから出して、それなりのスペースのあるところで、集中して、連続した日にちで調査をしたいということを前提に、今進めてもらっているという理解でよろしいか。

湯浅委員：はい、結構である。

櫻井委員：わかった。さて、スケジュールのところで、先ほどの、湯浅委員からの説明で、来年度の調査を前提に話を進めてもらっているという話だが、多分、宮本委員らが調査をすると、当然論文を書くということになって、論文をもって調査報告書という形になると思う。要するに、調査、実測をして、野帳を起こして、そこから図面を書いて、分析をしてということで行くと、結構そこから時間がかかると思うのだが。その調査に対して、そもそも論として、年度内にその報告書が出なくて大丈夫なのか。報告書は簡易的なものでいいのか、もしくは、そういうことも踏まえて、来年度と言っても、もう今9月で、多分その博物館とかの休館は、来年度の日程もある程度決まっているでしょうからという風に考えると、来年度も後半、しかも遅い段階なのかと僕は話を聞いていて思った。けれども、調査をやった報告書のスケジュール感とか、来年度の中でもどのくらいの時期というのがもし分かれば、ありがたい。多分、宮本委員とか、高橋委員の心積もりもあるでしょうから。

湯浅委員：ちゃんとした報告書については、その年度でなくていいと考えている。ただ、何月何日に、何人人工をかけて、どんなことやったという日報みたいなものは、年度末のところで報告をしていただくと考えている。要は、その図面を書いたりとか、分析したりというのは、それはその後の段階で必要になる。今、この会としては、その天守の模型3基をちゃんと分析をして、江戸時代の天守の姿がどうであったかというのを追求していこうということで、そこが、とりあえずのゴールだと思っている。それについては数年かけてやろうと心積もりがある。最終的に東博模型をやったという報告は、年度末の報告書で書いてもらおうと思う。だが、最終的な分析、要は3基まとめた分析は、少し時間かかると思う。そこは、来年度末ということまでは考えていない。少なくとも、天守の位置付け、江戸時代にあった天守がどんな姿だったか、できる範囲で調べて、もうこれ以上はとりあえずは出てこないというところまでをやった

上で、そこでとりあえずは作業終了と思っている。それは来年度に終わるとは到底思っていない。2、3年はかかると思っている。今、一生懸命宮本委員がいろんなもの調べられているので、その中で何か出てくるかも知れない。

櫻井委員：分かった。おそらく宮本委員は、東博模型を調査したのち、1本論文は書くと思う。それができた次の段階として、湯浅委員が言ったような3基の比較と、その他の歴史的資料を総合的に勘案して、小田原城の木造だった時の姿はこうであろうというような、推察をするという流れになっていくと思う。だから、多分東博模型単体の論文も来年度内は難しいと思う。おそらく宮本委員の場合、査読付きの論文になると思う。

岡 委員：基本的に、来年度できたとしても、データの取得までという理解でいい。報告の本格的なものはそれ以降でよい。こんな調査をして、一応終了したというものは、できれば年度内に報告した方が東博も安心すると思う。その成果として、図面を残すことも含めてということは、その先でいいと思う。

湯浅委員：県博や東博も「調査をした、傷ついていない」というところは気になるころだと思うので、その辺では簡易的でも、主に写真になると思うが、ビフォーアフターみたいなものは提出することになると思う。何日やった、誰がやった、どんな調査をしたというところと、大雑把に縦、横、高さぐらいとかの程度でよいと思う。細かい規格がどうのこうのというかは、多分、来年度でなくてもいいと思う。そこは、市としても来年度の中では到底できないだろうと思っている。

岡 委員：予算でどうなるか、まだこれからだが、やはり、通常出したり入れたりする想定展览展示はしていない。ですから、ケースを一部、解体する形で引き出して、また、調査終わったら現状に復帰するということを、美術品を扱う専門の業者に頼まないといけないということもあるので、そういった形の報告的なものは多少あるから、基本的には、そんな形になるのではないかと思います。

櫻井委員：わかった。

大島委員：調査のためにお金を出してるということを、議会が承認して、出すわけことになるので、当然その決算チェックの時に、どういう成果があったのかという話はあると思う。多分、その翌年の9月が決算特別委員会で、どういう成果があったのかと聞かれたときに、私の感覚では、今のような話プラス、どういうことが分かったのか程度の要約でいいのだが、これだけ調査によって新たな所見が得られたとか、多少で良いのだが、数行だけでもいただくと良いと考えている。

湯浅委員：英文論文だとよくあるが、論文サマリーみたいなものだ。あの程度のことは市としては報告していただければ、単年度の分については、問題ないと思っている。

櫻井委員：当然、調査する側も、模型をその場で見ながら、見ていくといろんなことがわかってくるので、その辺は、多分メモを取りながらやると思うので、それが報告書的なきちんとした文章にならないまでも、箇条書きでも、こういうことが分かってきたというようなことは、通常であれば言えると思っている。何か他にこの模型調査のスケジ

ジュールに関してあるか。質問がなければ、木造の方は、この模型の調査、文献の調査等々もあるけれども、色々進んでるようなところは感じられる。数回前のこの検討会議から、その RC 造の取り扱いというところに関して、いまだに我々も、誰がステイクホルダーで誰が意思決定できるのかというところが、ちょっとわからないところがあるので、RC 造の取り扱いについては、このままでいくと、だらだら時間だけが過ぎていくような感じもするけれども、どのようにしたらその RC の取り扱いをスケジュールに載せることができるのか、この辺のところをお聞きしたい。

湯浅委員：RC の現在の天守閣をどうするかというのは、本当にステイクホルダーが多いので、そういう意味では、観光協会も当然今ステイクホルダーになってくる。さらに、そこに入ってる売店もある。

櫻井委員：やっぱり調査が必要だと思う。私が言いたかったのは、まずは RC 造の調査ありきだと思うのだが、その調査に関してのステイクホルダーと意思決定をまず知りたい。

岡 委員：それは建物本体の話なので、小田原城総合管理事務所が管理をしている。前回の改修に伴って、15 年～20 年は、単に延命的に活用できるようにしてあるというところにはなっているので、その辺の期限を踏まえながら、その先をどうするかという検討は、まず小田原城総合管理事務所 で動いていく話だと思う。別にそれをするために、必要な声かけはあるかもしれないが、どこかの合意がないとできないとか、そういう話ではない。まず、小田原城総合管理事務所としては、あれをそのままどう延命できるかを考える段取りが入ると思う。それは、所内の方から、内部から上げていって、位置付けをしてやる。やるにあたっての年次を見据えるのと、やはり改修後の経年の劣化がどの程度進捗してるのかとかということ踏まえた上で行うようになる。それに対して、また再調査が必要なかどうかとか、そういったことを踏まえて、準備に入っていくようにはなる。

鈴木委員：木造で復元の検討と RC で延命の検討と、これが無関係に並行して別々の組織で進んでいる状態は、あまりよくないと思う。なぜかという、最終的には、政策決定ができる限り早く急いで、我々 NPO の立場からすると、木造で行くという政策決定を、できるだけ早い年にしたいという思いがある。そのためには、木造で行くのか、RC 延命で行くのかという、客観的な判断材料をきちんと並べて、結局はこっちだと流れを早く作りたい。そのために、この検討委員会として、どういう段取りを踏んでいけば、その二者の検討の流れがうまく両方進んでいって、できるだけ早い段階で、あの比較検討が行われて、こっちだみたいな状態に持っていけるかという、その段取りをはっきりさせたいという感じはする。今の状態だと、いろいろな場面が成り行きになりそうなので発言させてもらった。

櫻井委員：言い方を変えると、2030 年問題という風になるか。仮に前回やった耐震 が、一応 2030 年ぐらいまでは大丈夫じゃないか、というような前提で耐震補強が行われたということを受けて、2030 年問題という言い方をすると、2030 年問題をどういう風に

解決するかというのは、もう来年度 2024 年なので、先ほど湯浅委員が言いかけたテナントの問題もあったりとか、いろんなことがあると、なんかそろそろ動き出さなければいけないという気はしている。RC 造の天守がどの程度の調査をやって、どういう耐震補強をやったのかが、わからない中で、どのようにその 2030 年問題を捉えられてるのかなというところが、我々は分からないところがある。

辻村委員：シンプルに考えて、ここから次の耐震の目標としてるところまで、どこかでチェックポイントというのをきちんと決めてここで調査する。そして、この時に思ったよりも悪ければこっちの可能性がある、そうでなければ予想通りで、次までに延命しようということになると思う。木造を並行して検討していくという、シンプルなその魚の骨じゃないですけども、ポイントポイントでここがダメだったらこっちに行くということを、それをきちんと決めればみんなの議論がクリアになると思う。それをしないままだと、成り行きで震災等があった時というのはまた別の場面になるというのは、この間、色々お話を伺った。しかし、その崩れた時に、このポイントの骨があったから、それに沿って、この時点でもう木造の検討が走っているからこちらの線路の方に行くとか、熊本城のように、これは何を直す、即コンクリートで直すんだという、それが今成り行きでズルズルズルというところに、ちょっと釈然としないモヤモヤしたところがある。そのチェックポイントというのは決められるものか。それを誰が決めれば決まっていく、それがわからないので、モヤモヤしてしまっている。

岡 委員：私もできた当時のその辺の詳しいことは把握できてないので、耐震補強工事が終わった後に、次の点検年次をどういう風に設定して、その先の状況をどういう風に進めるというつもりであるのかは、確認してみないとわからない。通常、15 年とか 20 年という形で聞いているが、どういう状況だから、そう判断してるということの理解と、10 年目には、一旦簡易検査をすべきなのとか、15 年でやるとかということの想定があるのかないのか、確認をしたいと思う。そこで、例えば、10 年後でやろうとなつて、10 年後で、あと 20 年大丈夫、となり、また、議論が伸びてしまう可能性は出てくるかもしれない。今、天守閣を管理している側とすれば、あのままなるべく長期間活用したいというのが、正直というか普通のところで、機能も維持をしていきたい。ただ、それができないとすると、今持っている機能をどういう風にするかということも含めると、木造化と違う案との比較も出てくる。建物とか機能だけではなくて、それが周りに及ぼす経済的な波及効果とか、いろんなことを含めて比較していくようなことになっていくと思う。なかなか 1 つの所管だけでどうこうという部分ではないことは出てくるかと思う。そういういろいろな効果のことについては、外部から見てもらうところもある部分があるのかもしれない。今の建物自体の現状がどうなのかというのはもう一度確認をする。

鈴木委員：その物事の捉え方だが、どちらで行くのかということを上げたい。1 つは、RC 延命が大前提で、それがどうしても叶わなければ木造で建てるというシナリオで行く

のか。そうではなく、木造と RC と全く同時並行にメリットデメリットとか課題だとか徹底的に洗い出して、それで、なるべく早い段階でどっちで行くんだという結論を出すのか。進め方自体が、みんなの中で統一されていない。私個人としては、後者の方で行きたい。どうやったら、市全体の動きを作れるのか。まずは、前者みたいな方針で市全体として動くのか、後者のようなやり方で動くのか、いつまでもはっきりさせないと、動きようがない感じがする。

櫻井委員：少し分からないことがあるが、もう 1 つの決定という意味では、方法としては、ある程度の調査によって、木造の天守がこういう姿であったであろうというのが、学術的にある程度決まった時に、初めてやっぱり本来あるべき姿に戻そうという意志が動いて、その時にしないと RC 造の取り扱いをを決めないのか。そんな気も少ししている。要は、比較の対象として、木造の方は今調査中で、その木造というものはただ木で作るというだけの話なわけであって、その木で作ってできたものの価値というものが今分からない中で、とりあえず今ある天守とどんな価値になるかわからないものの比較は、今できないという話か。

湯浅委員：端的に言うと、木造で作る方が、私の感覚的には時間もお金もかかる。やはりそちらの課題をクリアする必要がある。しかしコンクリートも 100 年、200 年持つという話ではないと思うので、必ずどこかでやらなければいけないのかと私も思うので、どこかで最後のおしりというのがあると思う。それが分かっているのか分かっていないのかというのがまず 1 つあり、今、多分わからない。最後の、本当の最後のおしりが分からない。

岡 委員：前に耐震した時は、コンクリの再アルカリ化をするほど傷んではないという話だ。一部、壁の増強するとか、心材で柱を強くするとかというところをやっただけというのが議論で、もうすぐダメになりそうだなという感じでは実際はない。ただ、それも将来的なあり方のことはあるので、もう絶対に RC で行くのだという前提の補修でもないところがある。要は、最低限の安全確保を、見通しをしておこうと。で、その間に、今出てるように、対案となるような木造という方向性がもう少し具体化してくると比較検討の対象になってくるというところを見ている、というところは実際あると思う。

櫻井委員：あともう 1 つ考えられるのは、多分これから行う石垣カルテの調査をやる中で、断面計測をした時に石垣がはらんでるという話であると、これはやっぱり当然上からの応力がかかっている話なので、RC 造よりも軽い木造を載せた方が、石垣のはらみに対しては健全な対処法ということで、その重要な石垣の崩壊を防ぐという意味で、選択肢として、木造で建て替えようというのが出てくるのか。中に入れるものも全然、木造と RC とは違ってくる。

岡 委員：実際にどうなるかわからないが、現在の天守の設計上は、石垣には建物の重さをかけていない。杭を打っている。太い 2m ぐらいの真相基礎を何本か入れて、設計上

は、単純に石垣が崩落しても本体は崩れないという設計なので、建物が石垣に荷重をかけて、それによってはらむということはないはずということになっている。それをまた調べてみて、違うところが出てくればあれだが。

櫻井委員：杭があっても、横揺れの地震があった時に杭が揺れれば、当然、杭のその応力が石垣にかかってくるので、当然はらみは出ると思う。RCの検討がなかなか、少しモヤモヤしているというところの原因を我々なりに探ると、2点ぐらいある。2点というか、1点だ。木造の方が、明確なものになっていない中で、まだ比較検討、比較対象まで木造が地位が上がってきてないということなのかなと思う。

湯浅委員：おそらく、あのRCでの延命するという政策決定がされると、される前に持ってこようと言っても、おそらく数年で、こっちはある意味で言うと、すぐに答えが出ると思っている。おそらく、木造の方はそんな単純な話ではないので、極端な話なら、ちゃんとしたものを作るということであれば、当然石垣カルテをやるという話をしたが、石垣の積み直しからやらないといけない。おそらく木造でちゃんとしたものを乗せたとしても、現状では、石垣と天守の大きさが違うちぐはぐなものになり、全然ダメだという話になる。なので、もう全部木造でしっかりしたものを作ろうというのだったならば、石垣も全部外す、もう1回積み直す。そこにしっかり合わせたサイズの天守を建てる、にしないと、あの天守だけ本物にしても意味がない。そこは、おそらくお城としての意味合いとしては、もうこっちはもうできているもので、もう実際今現状寸法が合っていないわけだが、もう建っているものだから、それをなんとか延命しようという話は少しだいぶ違う。要は、お金の問題とか工期の問題とかということもあって、おそらくはそれほど調査していないということもあろうかと思う。ただ、概算で出るかもしれない。いくらぐらいかかるのとか、工期はどのくらいで、多分それは天守に私がいた時に、天守の耐震をやろうというのも、本当に工法から何かもう数年で答えは出た。金額的なものも数年で出した。本当に、そういう意味では答えはすぐ出てくるとは思っている。では木造にしよう、こんな姿でだったというところが分かったとしても、今度は、文化庁との交渉が始まり、おそらく名古屋城で引っかかってる通り、バリアフリーはどうするのか、とか、防災のことはどうするのか。中にある資料どうするのか等、木造にした場合、解決すべき課題が多い。RCは延命した場合の解決すべき課題はあまりない。だから、市として、そんな今慌てなくてもよいのかもしれない。とりあえず、こっちも熟度をあげていかないと、なかなか同じ土俵まで載せるのに時間がかかるという感覚はある。

櫻井委員：例えになるが、できれば圧力鍋にしてほしいと思う。やっぱりこう、ことごとく煮てくいうよりは、圧力鍋で一気にやってもらいたいと思う。どうやったら結論が早く出るのか。

鈴木委員：市の中に、本当はそういう、両方を一元的に検討するようなタスクフォースみたいなものはできないのか。

櫻井委員：危機管理センターになると思う。積み上げというのもわかるが、圧力鍋方式で少しスピードアップというか、クリティカルパスはあるんだと思うのだが、そこを踏まえた上で、オーバーラップで行けるところはオーバーラップで行ってという、そのスケジュールを今の話で行くと、木造のスケジュールをやっぱり真剣に考えないといけない。ここにいる我々の思いというか望みはなかなか叶わないのかなという気が少し今している。3つ目の課題になって、うちの理事長も言っていたが、その全体のシナリオというところに話が行くかと思うんだが、そのところもなかなかそこまでかけてこない。

岩越委員：私の感想だが、その RC の研究については、ある程度分かっている、その比較として木造の研究は全然できてない。やっているのだが、できてないという認識にまず立たないとこれは埋まらないと思う。湯浅委員が言ったように、そういう状況の中で RC か木造かと言った時に、決定的に木造をどうするのかというのは、不利という言い方がいいかどうかわからないが、逆に言うと、もうそういう状況だったら RC しかないという選択に逆になってしまう。今、我々は木造の調査をしていることに注力して、僕らはもう当然木造でいたいという NPO のグループなので、逆に言えば、それは我々が、市民に対して岡委員や湯浅委員の言っている認識をちゃんと理解してもらって、市民にもそれでも木造にできる可能性を検討しようとか、そういう力を上げてくれば、逆にそれが圧力鍋ではないけれど。だから、今、我々が注力するのは、木造の研究調査を、色々やってくれているのをもう待つしかない。この検討会にもある程度、僕はもうこれ以上ない気がする。これ以上何を検討するのだろうと思う。この話を延々としても、それはもう水かけ論じゃないが、追いついていかない。もうある意味で RC は、今でも持たせられるということであれば、市民はそれを知ったら、とりあえず RC でいいということになる。そうじゃなくて木造についてここまで研究している、ここまでわかっているのは、ある程度発表できるものをして、そういう可能性があるのならば、RC のことは少し置いてと、市民の側が言ってくれないと、こちら側としては動けないということを、私は現状として認識している。だから、東博模型の調査を、東博にきちんと調査をさせてもらう努力をする。そういう、東博に働きかけるようなこととか、むしろ、そういうことに認識を集中した方がいいのではないかなと思う。もうこれ以上検討する余地はないということが、私は分かった。もっとこう行きそうだなとなった時に、初めて RC をどうするのかという検討にはなるが、この段階では検討しようがない。ある程度煮詰まっていると思う。これをいくらやっても、むしろ岡委員が言うように、とりあえず RC をそのまま使い続けるところまでいきたいという方がどんどん行政側としては出ると思う。それは、木造のことは十分検討できていないからだ。これは言い訳とかではなく、現実を我々も受け止めなければいけないというのが私の本音だ。むしろそれをみんなで、こういう検討会議とは別に、木造のことでどのような結果が出るかを待とうというか、私の感覚

ではもう結構いいところをついてると思う。これをしっかり積み重ねれば、文化庁も嫌と言えないだろうと思う。そうした時に初めて文化庁がそれならいいでしょうと言った時に、RCをどうするかとか、石垣どうするかという検討のスケジュールが、まさにそこから初めてスケジュールが出る。今スケジュールを云々とやると、市が、文化庁や国交省と交渉する資料がない。例えば国交省とかが、小田原市が、天守の建て替えの議論はどこでやっているのかが、向こうには全然今知らされてない。水面下でやっているだけなので、それは難しいと思う。

湯浅委員：実は、文化庁にはもうすでに認識をしてもらっている。でも、この間もたまたまお会いした時に、少し話をさせてもらった。なので、我々としても小田原市として木造化についての検討をやっているということは、国の皆さんもなんとなくご存じなので、あとは、これをどれだけ熟度のあるものにしていくのかということになってくると思っている。我々としては、要は段取りをまず間違いないということ。我々としてもやるべきことをやった上で、文化庁にどうでしょうと持てかないと、何に基づいてやるのというところがある。当然、文化庁も今、復元とは別に、復元的整備という言葉が、最近になって出てきているので、必ずしも全部が分かっているなくても、ある程度の、それが何点かわかりませんが、100分の80なのか、100分の70なのか、50分かればいいのかは、そこはもう本当に担当の調査官、当然、史跡の担当の調査官に当然なると思う。整備の担当の調査官、現状変更の調査官、あと、多分木造となれば建築の調査官という何人かの調査官の方たちをクリアした上でおそらくこの話を上げていかなければいけない。そういう意味では、すごい茨の道がたくさんあると思うが、多分そこはチャレンジしていくということだろうと思う。その上で今回、天守の東博模型の調査についても、市としてもやろうということで、予算を計上していくことになっていると思っている。

岩越委員：文化庁には我々も行った。木造なんか問題にならないなんてことは何も言ってないので、それは我々市民と行政側の姿勢次第だと調査官はおっしゃっていた。そういう話を聞いて、そうだなと思った。だから、建てろではなく、どれだけ調査したか、どれだけし尽くしたか。で、それに対して文化庁は、調査官等がまだ不十分だとか、これを揃えなければいけないというかは、今後次第だと思う。ただ、私の感覚としては、かなりいい線は、もう自信を持っていいとまでは言うてはいけないと思うが、それなしには今後木造の話は自分の中で全然検討できない。だから、そういう途中経過でも、市民に行政も一緒になってこういうことやっていると思う。だから今度予算を取るわけだ。それ何のために予算出したのかと、絶対言われると思う。それは可能性ゼロの調査ではなく、可能性は限りなくある。それがもし仮にダメだという話になっても、そういうことを資料として江戸時代どうであったか 実際はどうであったかということは、博物学的に大事だと思う。もちろん、色々と調査した結果はあったが、まだまだ整理できてないところを、我々がやろうというところを一

緒にやっているわけだから、やはり将来の博物館構想も含めて、少なくとも天守周辺や天守については、我々も市民も協力して色々調査しよう、頑張ろう、でいいのではないかと思う。タイムスケジュールを作りたいのはわかるが、それは、なんとなく私の中では、オフレコでこんなことあるかなという想像と、すり合わせはいいが、こういう公式の場面でそれは言うのは、はばかれると思う。無理だと思う。

鈴木委員：この検討会議でどこまでやるか、この検討会議で何をやるか、そこをもう1回確認したい。みんな意識がバラバラだとダメだと思う。あくまでも、湯浅委員が言われるように、木造のための材料の熟度を上げるということに我々はそれしか徹しないよと言うのか。それとも、RCか木造かみたいなプロジェクトを、もっと市として公に動いているような形まで、我々は求めていくのか。その意識がそれぞれ違うといけなと思っています。

岩越委員：しかし、RCについてはもうある意味で見えてるわけだ。もういつかは消えなくなっていくのは分かっている。いつまで伸ばせるのかという議論があるので、その議論ではなくて、あくまで、やはり木造を実現させたいのならば、なおさら木造についての調査研究を充実させていこうという合意を取っていれば、別に行政がそれで木造するということと言えということではなくて、そういう方向を見ようというのは現実ではないか。

鈴木委員：言いたいことはわかるが、私が言いたいのは、ちょっと違っている。市民に対して、小田原市自身が木造かRCを本気で検討しているというアナウンスは、全くない。やはり市民の関心を集めるのは、小田原市として天守を本当に最終的にどうするのかという検討を本気でやっていること、木造とするのかRCで行くのかを市として一生懸命検討しているというアナウンスはどこにも出てない。

岩越委員：そうだと思う。しかし、それはやはり市民の声が小さいからだ。市民の側からすると、我々はごく一部と思う。何が言いたいかというと、結局、行政がやると言っても、まだ実際には、我々は結構深く研究調査してきたけれど、まだ入り口だ。だから、せめて東博模型を調査したいという姿勢は、それはある意味で木造化を否定していないということの姿勢だと思う。そういうことは市民に知らせてもいいと思う。そうでないと、市民は、なぜ調査するのか、それは必要ないではないか、RCでいいのではないかという議論があるわけだし、もうRCで耐震改修したのだから、余計なことするならもっと福祉と教育に予算を回せという議論だってなくはないわけと思う。だけど、もっともっと入り口のところでやらなければいけないことがあって、それを始めたということを成果として、それは我々がある意味、運動してきたからこそできたわけで、少し我田引水的に言ってもいいと思う。市民に理解してもらうためには、RCとの比較検討云々というのは少し後でいいと思う。というか、無理がある。結局、行政が先頭立って実行するのは、まだ少し私は時期尚早だと思う。行政側にも、これでいけそうだとか、こういうことまで分かったとか、こういうこと調べられた等

そういうものが出来上がってからならば、もうそれはもうやろうと市長に提案できると思うが、やはり市民と我々、行政が一緒になって、初めて進められると思う。だから、鈴木委員の気持ちはすごくわかるし、そうなんだが。私もそうだった。しかし、少し待てよと急がばまわれではないかなと思うようになった。それは結論出ないからだ。

鈴木委員：私としては、結論を急いでるわけでもないが、やはり市民が、木造で行くのか延命で行くのかみたいことを市民としても本気で真剣に考えなければいけないという意識が、市民に広がる必要があると思う。そのためには、NPO だけの努力では、どうにもしようがないと思う。

岩越委員：スケジュール的には、東博模型を調査して、そうすると、今 2 人がやっていることは、比較検討して、調査しましたという結果がきちんとできると、ここまでの成果でしたというものが出てくる。例えば、行政側も当然、予算要求し、もし、予算が通ったなら、それを結果を報告する義務があるから、その時に初めて一つの手掛かりとして、木造のことをもっと真剣に考えようということが言えると思う。だから私は、来年の東博模型の調査が終わった段階では、もう少し次の段階の市民に対しての公表ができるのではないかという期待をしている。今の段階では難しいというだけで、それは必要ないとか、それは無駄だと言っているのではなく、それはもう少し半年待とうということを言っている。だから、次の検討会議は東博模型の調査が終わってからの後だっていいというか、もうそれしかないと思う。あとは個別に相談をして、どうなのということはやればいいが、この検討会議そのものは、市民に公開してるわけだから、やはり成果をきちんと報告できるような段階で検討し、こういうことが出てきたから検討するというのが、私はもう来年度、予算が決まった後の 4 月ぐらいでいいと思う。

辻村委員：今、ここの会議が、方法論の会議になってしまっている。RC の延命と、木造とかその技術のことを調査してというのは、市民にとってはあまり分かる話ではない。そもそもこの NPO は、文化財としてそのお城というものは本来はあるもの、歴史を見るためのものなので、それがたまたま日本は戦争の後に、偽物作ったり、形だけ作ったりしていた。それはそれで、そういう時代はあったが、今の令和の時代になったら、やはり本当のものを文化として継承して、木の文化だからということで元の姿に戻すのが本来ではないのかということと、そこは市として、市民に対してそういう動きで、小田原市民は考えるべきではないのかということとを一方で進めて、水面下でこういう話をするので、ここを一生懸命市民に対してどうかと言っても市民はあまり関係ないと思う。市民としては、その例えば鎧兜というものの価値については、その時の工芸のもので、ちゃんとしたもので材料を使って作っていることに価値があるということは結構みんな知っているわけだ。お城も今見てるお城は本当のお城ではなくて、その時の姿の構造であり姿であるということと、やはりその先の文化に繋げて

いくためには、今やっておく、今我々生きてる人たちがやる責任というのはあるのではないかというのを、市長等がそういうのを問うのが市政であると思う。それをやっている時に、実はこういう材料をいろんなところで、研究しなければいけないので予算をつけているということで、そういう説明をしないと、市民はいきなり RC は延命する時期である、木造の方がいいというよりも、昔の本物を作るということは、やはり文化継承とか、それから職人の技能継承とか、いろんなことも含めて今手をつけていけないといけない。大地震が発生して壊れるかもしれない。その時に元に戻せる準備をする、そのために予算をつけるということをこの時点でしっかりとチェックをする。それで、このチェックポイントの時にもう 1 回市民にアナウンスしていくという、その姿を見せておく必要があると私は思う。しかし、そこが今抜けているというか、誰もやりようがないように思う。

鈴木委員：私もそう思う。

辻村委員：それで、一方でその研究をしなければいけない、RC の調査もしなければいけない、そのためには予算が必要である、と市民の方に、これは必要経費であるということ伝えて、今見てる天守が仮の姿だということをやはり知らせておかないといけない。それは市がやるべきで、観光としてもやるべきことだと思う。

櫻井委員：馬出門にしても銅門にしても、なかったものを復元してる。昔はあった。けれども、一旦壊れてしまい、その今回の RC 造のように、今あるものを壊してこれに取り替えるという話ではないと思う。

湯浅委員：市としての見解を求められると、そこはお答えできないということになるが、個人的な見解としては、現在の鉄筋コンクリート作りのお城に意味がないかと言われれば、私は意味がすごくあると思っている。それは、町の復興をするにあたって、天守閣、いわゆる天守が町のシンボルであった、ランドマークであったという、その住民感情があるわけだ。たとえば、名古屋とか福山とか福知山とか、戦争でやられたけど、すぐに 10 年も経たずに復興した。その歴史的な評価は、多分もう 100 年経たら完全にできる。要は城下町に住んでる人たちにとって、何が大事だったのかは、木造でできなくても、なおかつ観光事業債みたいなものを小田原城の場合入れている。要は、観光としても使える、市民の人たちもそうだが、そこに人たちを寄せることによって町の活性化を目指すという、そういう住民の思い、国も行政もそうだと思うが、小田原の天守閣はそういう意味合いの天守閣だと思っている。だから、偽物というところ少し語弊があると思う。偽物ではない、あれも本物である。しかし、もはや 60 年経っている。

辻村委員：私の言い方が悪かったと思うが、その時代の価値というのがあると思っている。おっしゃるところは、時代の価値としては、その時にあって評価もされて、それはとても役に立った。しかし、時代は変わり、例えば、東京でも昔の高層ビルを建て替えたり、いろんなことでまた違うことを始めてる。それは時代の、その戦後の昭和の時は

それが価値で、それが非常に役に立ち、それはきちっと検証して、いいことをしたということで良いと思う。しかし、この先はまた違う時代である。今立ち止まって考えなければいけないのは、次の世代にどうするかということは、それを今、考え始めている。そのためには、元に戻すというか、本来の江戸時代にあった姿、本来の姿としてやはりそれに戻すというのは、1つの大きな選択肢だと思う。戦後の混乱期ではなく、今は余裕があるとは言わないけれども、そういう見つめ直す平常心の時代だから、それをやろうということを、小田原市長がそういう宣言をすればいい。それでも反対で、今のままでいいのだと言え、もう、それはそれで市民の考えなので、それはそれでいいと思うが、それをやらずになんとなくズルズル、そのすごいことを小田原がしたのだということが、この100年それでいいのかどうか。だから、結果は結果でいいという判断で二重丸だと思いました。僕も。だけでも、それが100年、200年、二重丸のままでいいかどうかというのは、その先は二重丸ではなくなってくる時代が来ると思う。それに戻るには原点に戻るしかないというのが、それをやらないといけないと思う。さっきのあの偽物というのは少し私も申し訳ない言い方だったが、そういうつもりではない。

岩越委員：今、辻村委員が言ったことがとても大事で、結局その時代の使命は1つ終わったというのと、SDGsとか今後の支援を考えたら、RCというか、要するに石灰の量は実は日本の国産の材料でも、もうあと100年だと言われている。そういうことを考えると、やはり木造ということは、資源循環型の社会を描くときに、新しい進歩になる。形だけではなく、そういうシステムをどうやって我々がこう作っていくか。ここに眠っている大きな木を、切らないでおこうということではなくて、切らなければ実は循環していかないという視点もないといけない。天然林なら別だ。そもそもが植林の山なわけだから。それを、あの小田原の城下の中にある、1度あの富士の噴火とかいりんなことで災害が起きて、みんな木を切り尽くしてしまったから、次の時代のために作ろうという、300年の木を育てようということ育てた木なので、時代にすごくマッチしてるわけだ。だから、RCを残そうという私の中には議論はない。やはりその新しい時代のシンボルを考えたら、そういう方向しかない。だけど、先ほどから議論しているように、今それをどうのこうのというよりも、そういう視点を多分鈴木委員の言葉を借りればそういう視点をお互いに持ちながら、結論は出せないがそういう方向でやっているとか、そういうアピールをどうしようかという検討はしてもいいが、つまりそっちはここしか言えないということと、このことと、それとは関係なく、木造でできるかできないかということはオープンにできると思う。木造化すると言っているわけではない。できるかできないかということは全然オープンできるわけだし、これだけできた、どうかということはどうやっていいと思う。共有することと共有できないことを議論しているのは平行線だと思う。

湯浅委員：別に木造化に反対してるわけではない。ただ、文化庁も鉄筋コンクリートで新しいも

のを建てるのはダメだと言っている。要は、今の天守閣を壊して、鉄筋で作れるかと言われたら、それはない。だから、今ある鉄筋コンクリートのものを延命するか、もう延命しきれないのなら木造にするかの2択だと私の中でも思っている。新しい鉄筋コンクリートはやらない。それはやってしまっただけいけないと思う。ただ、今あるRCの建物に価値がないのか、と言われると、必ずしもそうではないという風に思っている。そして、木については、私も辻村委員と同じで、木でどんどん建てた方が、昔の建物をどんどん作った方がいいと思う。だから、今ないところはこれでいい。銅門もそうだ。馬出門もそうだ。小田原城は基本的に江戸時代末期の姿に戻そうと言ってるわけだ。そして、もっとたくさんの建物が江戸時代の末期には小田原城内にはあったわけだ。当然のことながら。だから、それをコンクリートで復元するのはないので、これはもう粛々と木でやる。それにも分かるかわからないかという問題があるので、分かったところから粛々と復元すればいいという風に私は思っている。ただ、そういう意味では1番ハードルが高いのがまさに天守閣である。今も、偽物とは言わないが、ちょっと形の違うものが残っているのだが、やはり天守閣は作ったという意見が出る。それをもう1回崩して木にするのよりも、建物が無くなっている所の建物を作った方がいいのではないかという議論になると私は思っている。あるもの壊して木にするのならば、ない所に木で建てた方がいいと思う。という風に、シンプルな市民感情みたいなものかも知れないが、私はそう思う。それだったら文化庁も、江戸時代の末期の姿に大体すると小田原市は前から表明しているのだから、どんどんやればよいと言われると思う。どんどんやればよいとは言わない、お金がないし、そんなに予算があるわけではないから。どんどんやったらお金がなくなってしまうので、粛々とやったらどうかということになると思う。

岩越委員：天守は置いといて、全体として木造で復元することを頑張るというのは全然言えることだと思う。その中に天守の課題があるという位置で、RCをなんとか少しでも予算がつけば、いろんな皆さんの声があれば聞くが、そうでない時には、スタンスとしては、今の安全性を考えたらRCを残すことになると思う。偽物と言っていたが、そのようなことを言ったら藤岡先生に申し訳ない。それはきちんと調査した上での、復興天守で、模擬天守ではない。そこにはないものを作ったら、それは偽物と言ってしまうが、小田原城の場合はある程度ちゃんと調査して、江戸時代に高欄はなかったが復興にあたり付けてしまったが。だから、木造に建て替えるときは、ある意味では資料にはなる。藤岡先生が調査してくれていたから、逆に彼らも調査を進んだわけだ。そういう意味で、全体として木造にしようというスタンスをもっと言ってもいいと思う。それは市民にまだ理解されていなくて、なんで木造にするかということをもっとつけ加えて、資源を循環するためにはその木造というものは新しい時代のサステイナブルな建築ということになる。そのシンボルとして小田原城を見てもらうとなると、単なる歴史的な価値だけではないというのは私は訴えたいと思うし、それに意味があ

と思う。

古川委員：私も、1つの木造という部分はわかるのだが、ただ、やはり市民として、その隅櫓を木造にするという話は盛り上がるか。感情は、要はやはりシンボルである昭和35年に建てた天守を、わざわざ壊してでも木造にするというところの盛り上がりというか、そこまでみんなで結論付けるといふ部分でないといけない。お金がかからないものだったら、億単位でもそうでもないというものであるならば、市の予算で、議論しなくても建て替えることができると思うが、やはり市民1人1人の思いがきちっと伝わって、思いがあってこそ建て替えをするという風にならないと、本物ではないと思う。本物ではないと言い方は変だが、いわゆる江戸時代の徳川將軍のための天守閣だったわけだが、それを今度、令和の時代は、市民1人1人のための天守閣に変えるということが、私が1番大事なところだと思う。

岩越委員：今言いたいのは、立ち位置のことを言って、湯浅委員は個人市民、行政職員ではなく市民の会員だったら、それは自分だって木造にしたいと言うかもしれない。だから、私らは当然その立ち位置だから、それをガンガン言えればいいと思う。それは、喧嘩するような感じではなく、私たちは、もちろん個人的な意見はそれぞれが違っても知れないが、やはりRCだという人もいるかも知れないし、行政の中でそれは議論できないと思う。だから私らはどんどんそれは声を上げて、今、古川委員が言ったようにそうなんだということを、行政側は聞くしかない。だから私らは、別に遠慮する必要はないと思っている。だから当然、天守を建て替えて木造にするという声をどんどん我々も上げていく。このテーブルについていることだけでも、我々と行政が対立しているわけでないことが分かる。それだけでも、1つのプロジェクトは進んでいると私は思っている。RCにするか、いつどうするかということを、これから冷静に判断していく、材料が揃えばそうなると思う。今、材料がない中で議論しても市民に対して僕らも言いようがない。木造にするべきと理念は言う。今言ったSDGsがどうのこうのいう理念でも言っていく。しかし、現実論で言うと、手続き論からすると、それはまだ時期尚早であると私は言いたい。行政の考えとの差を私らは淡々とを埋めてくしかない。私らがやっている調査とか、そういう市民の声を拾ってくると、行政としては、もうそうせざるを得ないという状況になった時に、初めて我々は大手を振ってできると思う。でないと、名古屋城みたいに市長がガーンと言った。もう現場はオロオロだと思う。資料が揃ってないのとなる。それで、いいところだけワーという。確かにこれで木造にすれば、世界に誇れると言うかも知れないが。結局、兎にも角にも手続き論がある。いろんな事業にしたって、我々だってそうだと思う。やはり手続きは手続き、粛々とやるしかないという行政のスタンスをずっと私が聞いてて理解した。だから、NPOのことを私は否定しているのではなく、私は、NPOのスタンスである。NPOのスタンスとして、木造だろといくらでも理念として言える。でも、手続きをどうするのかという調整をしてきて、私は見えてきたので、そこは粛々とや

りたい。それで、公開できるものはどんどん公開して、ここまで分かった、ここまで進むと市民の皆さんにこういう状況だと言えることを言っていきたい。この会議の議事録で、公開しているわけだし。

湯浅委員：市民のところで言うと、総合計画も、木造天守も含めて検討と書かれているので、市民の方がどれだけ総合計画を読まれてるかということはあるのかも知れないが、そこについてはもう市民に表明して、小田原市としてのスタンスは表明を、それも含めて検討していくということになっている。我々は粛々とそれも含めて検討するという立ち位置である。

岩越委員：当然、今の段階では RC にすべきだ、残すべきだという市民もいるわけだから、その時に行政としてどっちに偏っているというのは、当然、市民から指摘されるわけなので、慎重にそこは行動していると思うし、それで私はいいと思っている。だから、これ以上言うことない。

岡 委員：最終的に市民の皆さんに愛されるものにしたいわけで、意思決定はそこが重要だと思う。文化庁がいいと言ったからできるわけでもないし、首長がいいと言ったからできるわけでもない。まして役人がやると言ったからできるものでもなくて、やはり一人でも多くの市民の人が、それだけ金もかかることなので、場合によっては晩のおかず 1 品当分減らしてもいいやぐらいの覚悟で、みんなで一丸にならないと本来できることではないのだと思う。言われてるように、城跡を今後整備していく流れでは、木造化というのはもちろん、そういう流れになっているのは間違いないところだと思う。ただ、そこでどういう風に市民の人に理解を得て広げていくのかというところはうまくしていかないけない。天守はシンボリック存在だから、そこで意見が二分したら、今度どうなるのかという心配もある。やはりいろいろ作戦は必要になると思う。もう少し規模の小さいところを順次進めるという考え方もあるし、天守は、やはり市民にどう広げていくのかというところもあると思うが、当然そんなところにお金かけるなどという人はいっぱいいる。例えば、今、学橋をはずせと言ったら、多分反対する人はたくさんいる。あれは、城跡を整備する場合、あるべきものではないから。例えば、昔、住吉橋があり、復元して本来の住吉橋ができた。当座、隅櫓橋という変な名前をつけて維持したが、本来あるべきものではないということで撤去になったが、はずすにも相当反対する方もいられて、なかなか、みんな簡単に納得していただいたわけではなかった。だから、本当に学橋も外すとなると、市民の方にやはり本来の小田原城の姿と価値を理解してもらって、どれだけ愛してもらって、必要性を感じてもらえるかというところだと思う。天守を再建した時も、小田原市は一貫して復元と言ってない。復興天守という表現をして、完全ではないですよということを言っている。ちょうど戦後復興と高度成長期にあたるが、その 1 つシンボルという意味で、町村合併を大規模に行った時期に、瓦 1 枚運動などに寄付してくれる、いわゆる城下町でなかった地域の人たちもそこに寄せてくれたので、新たに誕生した広域の小田原市の新しい

シンボルとして再生された意味がある建物だとは思ふ。だから、あの建物を今後どうしていくのかというのは、本当に市民全体のなるべく多くの人の合意ができるように持っていきたい。そうなれば、役人がどうこう言おうが自然にそういうことにしかないとは思ふ。

湯浅委員：無いものを作るというのは、エネルギーが集まって行くのだが、あるものを壊すというと、無いものを作る倍どころでないエネルギーが必要になる。そのあたりについて、こういう会議の席上で軽率には発言できないというのが正直な考えである。

辻村委員：今、神宮外苑で揉めているが、アナウンスがあまりに短すぎるからいけないので、RCの延命化ということはこのところでやる、また、ここで調査すると言って、ダメだったら次の手を考えなければいけないためにやるということを長年かけてやっていけば、その将来は、やはり壊すことも考えなければいけないということが市民の中にあれば、だんだん、おかしくなってくるものを延命しろという人はいないはず。だから、元々、何十年か延命させる処置を何回かしてきたけれども、それをちゃんとチェックしていくということを言えば、その先にアリバイ作りではないが、しっかりアリバイがあった上で再開発する、再建するということになる。これ水面下でずっとやってきて、さあ木造化できる準備ができたと言った時に、またそれはそれで税金の無駄遣いと絶対になるから、今から30年、20年とかかけてやらねばならぬ事業であると説明するのが、やはり市民との対話する行政の役目でもあると思う。

岩越委員：ちょっと議論がずれるかも知れないが、どうしても木造かRCかという話になっているが、私はそもそもなぜあそこに天守が建ったのかという重要なことを、もっとこれからの時代のために知る必要があると思っている。大地のへりにあるわけだ。それは江戸城も同じである。実は水脈の要である。最終的に喫水や海と陸地との境の所にある。だから今、例えば木造にすればいいだけという風には思っていない。この前、二宮神社の前に道路があるが。あそこは排水が悪いから工事しているが、全部、そこを目詰めして、道路整備している。これは今の現代的な土木の考え方と言うと、水はけをよくするようにやっているのだが、丸亀城も石垣が崩れた。あれ、なぜ崩れたのかと、清水建設の石垣担当の山内氏が言っているが、排水をしっかりとメンテナンスしてないからである。コンクリートで固めれば固めるほど、なぜRCがいけないのか。天守だけ一生懸命やっても。今、明治神宮の森さえ疲弊している。周りにRCの建物どんどん立てて、水脈をみんな切ってしまっている。だから、井戸さえ枯れ始めている。そんなのいっぱいあちこちである。私は、なぜ天守木造にという時に、その環境の要、これからの時代はこれだという、逆に言うと理念を持ってやらないといけない。このまま議論していると全然違う話になるから言わないが、私はそこである。天守木造の前、この3人と出会ったのは、環境政策で出会った。森の方もそうだし、街がコンクリートで固められれば固められるほど災害がどんどん増える。この前、私が見たら、小田原城の石垣がはらんでいた。排水が全然ない。本丸の所を

がちがちに固めて、そこに水雨がどんどん溜まっていたら、石垣の内側がヘドロ状になって、あれは必ず崩れる。だから、ほっといてどうにかしないで、災害が起きてからでいいだろうと思う人がいるかも知れないが、その現実をしっかりと見れば、なぜ木造にするべきかというのはわかってくる。石をきちんと入れて、。そういう、昔は石場立てというのやっていた。あれは、石しかないからでない。排水が重要である。水の流れを詰まらせない。今のコンクリート擁壁工事とかみんな詰まらせてる、国交省がそういう風な基準でやってるから。清水の方も言っていたように、RC持つ、100年は持つ、でも石垣は400年持つ。これは1つの新しい時代に目覚めなきゃいけない。土木、建築も。だから、小田原城を単に木造だからシンボルとして、そこをやればそういう問題も見えてくると思って私は木造と言ってるわけで、天守だけを木造にすればいいということじゃないでない。でないと、本当に危ないし、また災害が起きる。木造で建てたらいいが、石垣全部崩れた、三の丸で大きな被害を受けた。でも、木造としてやっただけの話になって、本当言うと、全部やらなきゃ、そういう問題はらんでいる。でも、それはもう100年にかかると思っている。100年かけてRCの都市を作ってきてしまったのだから、それを一気に直すことはできない。で、それをするためにどうするかというのは、住宅の一般のところでは難しい。マンション建てたい人がまだいっぱいいる。だから、小田原城と江戸城もそうだが、神宮の森もそう、それから外苑もそう、そういうところをしっかりと設計でやろうと、都市計画しようといいたい。そこから市民に理解してもらったら、木造の意味は何も過去のことをアーカイブした、なんか懐かしんでる歴史だけの問題じゃなくて、今後の日本の都市計画のあり方として何が大事か。木造を使えばいいという話ではない、と私は思っている。そこは熱く語りたいが、議論にならない。ここですることではないが、余計なことだと思っているが、そういう視点で私は見えているということをもっと本当は言いたい。だから、はっきり言って、当分木造でなくてもいいぐらいに、もうその環境をもっと大事にしてくれといいたい。もっともっといろんな災害が出てくると思う。余計なことだが。

櫻井委員：ちなみに、最近、首里城に行ってきた。1つ思ったのは、前回燃えてしまった首里城を今回復元するあたり、新たな資料が見つかったので内部の建築とか装飾とかも含め変わるらしい。それは、鎌倉さんという写真家の方が、昭和の時代にあった首里城の写真を結構撮っていて、それが見つかったらしい。それを元に復元を進めていくとのこと。市民感情という中では、我々も最初の頃はもう少し写真がないのかと大騒ぎしていたが、最近そういうことも言わなくなって、ある模型でなんとかしようみたいな話になっているが、やはり小田原として、我々の文化資産をしっかりと後世に引き継ぐというところはしっかりとやっているという意味で、もう少し国際的なところにも、明治4年に撮った写真がイギリスの方が撮ったという話もあることから、小田原はこういうものを探しているところを、例えば大使館とかに色々言って問いかけてみ

て、新たな天守閣の資料探し、もしくは、そこで櫓の写真が出てくるかもしれない。資料探しは、首里城を見た時に、やり尽くしたというのは無いのかなと思った。やはり出てくることはあると思ったので、そこはぜひやれるといいと思う。もしも写真が出てきたら、これは大逆転で画期的で木造の話はすごく大きく前進するような気がする。そのところはやってもいいのかなという気はしている。あと、産業の話になるが、首里城を見に行つて、沖縄で清水建設のヘルメットをかぶっている人ばかりが働いてるというのは、沖縄の人はどう思っているのか気になる。国、県ではなくて、大きなゼネコンが色々あるので、清水の人たちがこう大手を振つて、大きな現場をやつていて、あの人たちに言うと、島人ではなくて内地の人が来てやつてっているというのはどういう感情なんだろうかと思う。できれば、やはり城を作るときはある程度は昔もそうであったように地元の人の手でやるべきだと思うし、そういうことを考えていくと、他のプロジェクトとかとうまく兼ね合わせて、まさに地域で作れるような体制を作るというのは、僕は重要なことであると思った。

岩越委員：だから、この小田原城天守等復元的整備検討会議というのは、1つの流れが見えたと思つていて、次のステップに進むために、今おっしゃつたように、具体的なものが出てきてから具体的な議論に私も早く進みたいと思う。さっき言つたように、天守の木造だけではなくて、その周りどうするのかとか、それから職人の問題どうすんだとか、ゼネコン入ったらどうすんだとか、そういう議論に早く進みたいと思う。それらの課題がもう膨大にあるはずで、積算もしなければいけない。本当にどれだけ使える木があるのかとか、もうそっちの方は早く進めたい。でも、調査が終わるのを待つしかない。

鈴木委員：この会議始めた当初、大きな表に課題を整理した。あれを最近持ち出してない。だから、もう1回基本に戻つて、このプロジェクト管理というか、プロジェクトマネジメントをきちつとしていくためには、課題を絶えず整理し直すという作業は必要と思う。

岩越委員：我々は、色々とヒアリングしながらシミュレーションとして、マイルストーンを作つた。あれでまず十分で、あとはそれを具体的に穴埋めするだけで、いつに例えば政策決定をするのかとかが、大体分かつた。それまでに何をするかの具体的な詰めをするだけだ。本当に行政から色々聞いて、マイルストーンもできたわけで、あれを元にしていけば、改めてそこをなんか突つとく必要はないと思う。

鈴木委員：別に、改めて突つとくと言っているのではなく、あれが元になって、直近ではマイルストーンに形が変わつていく。だから、もう少しマイルストーンを埋められるところをもっと埋めて、プロジェクト全体の進め方をみんなが共有するということは、まめにやつていかないといけないと思つている。

岩越委員：それには、小田原城総管理事務所と文化財課だけでは足りないと思う。だから、別の形にするのが、個別に前に提案したように、企画政策課と色々な詰めの話をして

みるとか、経済部農政課と木造の問題に、実際に櫻井委員が別の形でやっているのを、それともう1つ、差し障りがないのは天守周辺の小田原城内での木造の使い方について検討するとかという部署、そういうところで詰めるとか、分科会的にやるとかいう風にしないと、ここのメンバーでやっていたら難しいと思う。

鈴木委員：そういう面で、企画が入ったり他の部署が入って、要するに主に天守の話になるけれども、「天守をどうするんだ検討会議」ではないが、全庁的にやるべきことを確認して、それぞれがまた分担しているんなプロジェクトを進めていくスタイルを作り上げないといけないと思う。

岩越委員：そうすると、ここの検討会議で1つの成果を出しておいて、次の段階で企画政策課に加わってくれという何かを作らないといけないと思う。この検討会議の中で、これ以上の議論ではなくて、ここまで1つの結論が出ました、調査研究が大事です。それからRCと木造の比較検討をするというところまで来たという結論が出たと思う。そして、それをやるとマイルストーンが見えてくる。いついつまでにというアバウトなものしか出ないが、やらなければいけないことは見えてきた。それをこの検討会議の成果として、一旦それを出さないと、次のステップに行かないように思う。それで初めて、今度企画政策課だとかいろんな部署とどういう風にするのかというのは、例えば、来年4月からそういう風にやろうというのは、これから11月、12月、1、2、3月の中で、我々もヒアリングしながら、やっていくしかないと思う。この検討会議のこのままの継続は、はっきり言ってもう限界だと思う。

鈴木委員：今日の発言聞いていると、その思いとかコンセプトとかという話はたくさん出るが、議論がそこでおしまいになってしまうのと思う。それであれば、1つの成果として、マイルストーンは一旦書きましたということは、あれはまだ誰にも公表、公開されていないわけだ。だから、マイルストーンをどの範囲で公開をして、新たな他部署を巻き込んだ、そういうプロジェクトを進めていくのかがこれからの課題だと思う。

岩越委員：公開していないのは、まだきちっとしていないからであって、それを1つの基準にして、共有データとして、公開しない関係者には回して、こういう風に作ったが、何か考えられるかどうかを1つの資料としてみんなで検討するにはも何も問題ないと思う。このマイルストーンでやるというような印象を持ったらそれは大問題だ。ほぼほぼ出来上がってるが、あとは、経済的な議論をしなければいけないと思う。企画政策課だねとか経済部だとかと詰める作業することになるだろうと思う。

鈴木委員：全庁的に関係部署が集って、この天守どうするんだということを、検討していわゆるタスクフォース的なものをここで立ち上げてもらって、この検討会議は横の位置においていくような体制を作らないといけないと思う。

岩越委員：なので、もう年内にというのは、とてもできない。この検討会議の今までのアーカイブ、議事録を読み返しながら1つ来年の春ぐらいまでに、この検討会議でこまのことをやった。1つ成果を出して、次のステップに進もうという提案をするために、

1 回まとめた方がいいと思う。

櫻井委員：湯浅委員が、さきほど言っていた来年度の東博模型の調査に関わる予算要求の結果が出るのはいつぐらいか。

湯浅委員：議会の議決を経る 3 月末になる。公表できるタイミングはそうなる。議会通さないで、もう予算がついたかのような議論をすると、議会軽視になる。もちろん、予算資料が、2 月ぐらいには各議員の手元に行くので、小田原市がどんなことを考えているのかは、2 月ぐらいに公表される。しかし、最終的に決定されるのは 3 月末になる。3 月 25 日ぐらいでしょうか。そこまでは確たるものは無い。我々としては、この予算を要求しましたが、大体 2 月の中旬に公表、議会での議決が 3 月末になる。

櫻井委員：宮本委員らの調査は、この検討会議で部会を作るという話もあって、今、部会扱いになっている。この検討会議として、宮本委員らの調査はおこなっている。

湯浅委員：部会ではないが、色々と宮本委員からはこんなこと調べたり、岡委員のところ中心に来ているので、なるべく一緒に動けるところは、一緒に動くようにしている。素材としては提供させてもらっている。協力させていただいている。あくまで木造天守がどうなのかということを、我々としてはやるべきことだと思っているので、そこについてはやらせてもらっている。

櫻井委員：そうすると、この検討会議という箱は、宮本委員らの調査を潤滑にする役目を別の形にするのか、この箱をある程度残しながら文化部とのコミュニケーションのために残していくのか、そこの判断はした方がいいと思う。

湯浅委員：岩越委員が発言されたように、必要に応じてというのもあると思う。また逆に、後藤先生に色々アドバイスをさせていただいていることがあるので、この箱を解体すべきだとは私は思っていない。あってもいいと思っている。ただ、あまり話のネタがないのにやみくもにやってもという感じがある。例えば、年度の頭に今年度は何やろうか、そして、年度の最後に今年度こんなことできたというのは、あってもいいと思う。あとは、年度の途中で何回開催するのかは、年度々々で変えていいと思う。おおむね、他の委員会も、同じように進めてる。大体 3 回か 4 回ぐらい予算を取っておいで、実際、特に大きなネタがなければ 2 回で済ませてしまうというのはある。それはよくあるケースと思う。

岩越委員：結果として、この検討会議が調査研究とか木造をどうできるかということに集中しているので、そういう風になっているが、いずれは拡大しなければいけないと思う。鈴木委員が言うように、一旦はそのまま続けて、内容としては調査研究とまとめをして、次のステップに行くことができればいいのではないかと思う。

湯浅委員：先ほど、櫻井委員が発言されたような、大使館に照会をかけるというのは、なかなかハードルが高いが、写真資料は、今もいろんなところから断片的に出てくることもある。実際に箱根口は、ここ 10 何年の間で見つかったりしている。そこはやはりアンテナを高くしていくしかないと思う。次から次へとそういう視点で本は出てきてい

る。我々もそこは注視するようにはしている。箱根口は、まさにそういう意味では、外観の写真が出てきた。さすがに大使館までというのは難しいかも知れないが、誰がイギリスに行くのか、英語は誰もできないみたいなのがあったり、色々あるが、ここにあるとはっきりわかって、なかなかそれが公開されてないというのが分かれば、それは交渉のしようがあると思う。平塚も、かつて B29 がどこから出撃してどこに動いたかというのを、どうやって平塚に来たのかが、ここにあると分かって、それを実際市役所の方で調べたという経過がある。でもそれもここにあると分かった上で行っている。ある程度分かって、なかなかそれが公開されないようなものであれば、そこは動く必要あると思う。闇雲に問い合わせしても、小田原城の写真はどのようなものか、みたいなどころから始めなければいけない。そうなるとなかなか、大使館に行くと、何それみたいになる。小田原城と名古屋城の外観上どんな特徴があるのかと説明しなければいけない。なかなかそれは実際写真がない中でお話するのは厳しいと思う。我々が見れば、おそらく小田原城か違うどこかの城なのかは、ひょっとすると分かる可能性はあると思っている。もちろん、必要に応じて写真については探さないといけないと思っている。写真が今後出てくる可能性は十分あるとも思っている。

櫻井委員：そこは、イギリス大使館に話をするという方法と、在英の日本大使館に話をするという方法があると思う。在英であれば、言葉の問題はないと思う。やはり大使館の1つの目的は、その国に行って日本の文化を広めるというのがある。逆に、その国に行って日本の文化のことを調査、資料の収集するというのも、彼らの在外公館としての役割になると私は思う。そういった意味では、イザベラバードさんが金山町に行って、金山町はイザベラバードの言葉を使って色々やっていたりする。明治4年の写真もイギリスの旅行者が来てということで、当時、イギリスの方たちが日本に来てたと考えると、ピンポイントでイギリス政府にアプローチして、日本はその歴史的なものを復元するために資料の収集をやっているということで、何かその方法論、闇雲に聞いているのは難しいと思うが、例えば RIBA という王立建築家協会にアプローチをして、私も入っている日本建築士会連合会からアプローチをして聞いてもらうとか、色々動き出せばやりようはあるとは思う。

湯浅委員：我々は全くそういう経験がないので何とも言えない。

岡 委員：行政含めて懸賞を出しているお城があるが、だからといって簡単に集まるものではない。それは、そういうポーズを示すというところだと思う。古写真だと長崎大学とかがかなり集めていて、そういった連携とかで情報が入ってくる。やはり行政が動くには、あそこにある程度ありそうだとこのところの情報を把握したうえで調査に動くのが常識と思う。あと、既存の写真で違うお城の名前で整理されていたりする可能性があるから、そういった見直しももちろんあると思う。古写真とあと鯨も探したい。日本にはもうないようだ。ドイツ人が買って横浜に運んだらしい。ドイツ人が買ったからと言ってドイツに行ったかはわからない。誰に売ったかも分からない。だから、

そういう情報を集めるために何か盛り上げるようなことができるといいと思う。

古川委員：その辺のところをどういう風にやるのかというところが課題である。我々も色々今までやってきてはいるつもりではあるが、そこから先に行かれない。逆に、市の力を借りてできるものであるのかと思っている。

櫻井委員：市民運動とか、市民の機運を盛り上げるためには、そういうことも必要かなと思う。

大島委員：実は、平成 15、6 年頃に馬出門の整備をしている頃だが、写真を探していると広報誌に出したことある。ですから、とりあえずパッシブだけど、そういう投げかけがあってもいいと思う。一案で実現するかどうかわからないが、日本遺産という制度があると思うが、あれは元々インバウンド狙いのシステムで、文化財的には少しはてな、というところはある。実は、インバウンドを狙って、むしろ情報を外国に発信してきてもらうぐらいの感じで、来た人に多言語化したパンフレット渡すだけではだめだと文化庁も言っている。もしかしたらネット的なもので、小田原城も日本遺産の箱根の構成資産なので、そこを紹介してくれた時に、そういう情報も入れて出していく。あくまでパッシブだけど、海外にまで届く我々ができそうな点だと、そのようなところがあると思う。あと、前も話したかも知れないが、やはり、馬出門の所の写真を探してる中で、馬出門の設計コンサルをやっていた文化財建造物保存技術協会の方で写真に非常に詳しい方がいたので、色々お話を伺ったことがある。長崎大学で小田原城の南曲輪の櫓の写真が出てきたりするのだが、ほぼほぼ国内は出尽くしてる中で、あと見込みあるのは外国である。ただ、外国のほうも、全く台帳化されてないようなところに眠っているという可能性の方が高い。搜索すると、あるかどうかわからないけれど、リュック背負って 10 日ぐらい外にこもるつもりで探すと出てくるかどうかみたいな感覚だという話は、聞いたことがある。二十世紀入る前後ぐらいで、日本の写真がコレクションとして流行したことがあるとのことだった。しかるべきクラスのお家には、そういうものが眠っているということはまだ期待できるという話は、聞いたことがある。そういう意味では、海外に探る手を伸ばさないといけないだろうというのは確かにある。

櫻井委員：世界と言っても、その時代に、写真機を持って旅行できる人がいる国は限られると思う。

大島委員：コレクターだから、ヨーロッパかアメリカか。

櫻井委員：そうだと思う。

辻村委員：湯浅委員にお伺いするが、いろんな協議会が市にあるが、私が出ただけでも、その環境まちづくり協議会とか森林再生協議会とか、あとアーバンデザイン協議会とかがあがあるが、それぞれがお城のことについて何らかに関わってくるたびに、多分、お城についてそれぞれがエネルギーを使って考えられると思うので、その時に、この我々の動きとかそういうもので、そのエネルギーをどこかに集中していかないと、それぞれがみんな縦割りで違うことをやって、偉い先生がいるところの意見に引っ張られたり、

そういう協議会もある。そのコントロールを市でできるところがあるのか。いつも出るところで、同じようなことを違う人たちが考えているので、無駄だと思う。

湯浅委員：他の協議会からすると、天守の木造化はおそらく主力な議論のテーマではない。

辻村委員：だから木造化、例えば観光まちづくり協議会は、お城を題材するが、入れ込み人数とかイベントとかで、もうそっちだけになっている。言ってみればお城が観光施設の建物としか認識していない。だからそれが未来永劫、あると思っているに近いところなので、そういうところでもこういう動きが、やっぱりその将来を考えないといけない。アーバンデザイン協議会は、まさしくアーバンデザインとしてどう考えるかが非常に重要だと思うし、森林再生協議会は、こういうのが重要だと私が言っているから、もちろんこのことは念頭にはある。誰かがこのように兼業していればいいが、そうではないと、この協議会の話と違うところで、また学術経験者とかコンサルタントとかが出てくると、話がまたガラガラポンみたいな可能性がある。少し危惧してるので、本当に横の連携が必要だなと思う。

櫻井委員：答えになるかわからないが、先般作った木造建築推進協議会の中には、関連有識者という形で、森林再生協議会はメンバーに入っていたいて、アーバンデザインセンターの杉本先生にも関連有識者として入っていたいて。長澤先生は学校の木質化とかをやっている方で入っていたいて。我々が考えられる範囲内で情報は掴めるようにと、木造建築推進協議会はしている。

湯浅委員：今の辻村委員の意見への答えはすごく難しいと思っている。それをコントロールすべきなのかどうかというのがそもそもある。それぞれの委員会の独立性とかを考えた時に、それぞれのところでそれぞれの意見が出てくるのは当然あってしかるべきだと思う。集まってる方が違うわけですから。それを最終的に調整していくのは、やはり我々行政のやる役割だと思う。最終的にはその何かを政策決定するときに、いろんな委員会で違う意見が出てきたとするならば、それを政策会議は、市の本当に幹部の人たちが話し合う場所になるので、その手前の段階で我々が、うちの委員会でこうなっ田みたいなところを相談していくのかと思う。多分そこは、それぞれの委員会に何か枷をかけるようなことは、基本的には、1つの紹介、当然である。我々、例えば文化財保護委員会に事務局案とか出すが、要は、事務局案とは全然違うことが返ってくるのがままあるので、そこに枷をかけること自体が、とても難しい。

辻村委員：そこが民間企業と違うところで、民間企業は、その会社の方向性が1つなので、いろんな委員会があって、いろんなことの会議を行っているが、無駄なエネルギーは排除しよう、そのエネルギーを1つに集めようとする。なぜなら、この社是に向かって進むのだからというところがあるわけだ。だから、小田原市は、小田原市民のための、小田原市の税金を使う行政だから、その社是ではないが、そこに向かわなければいけないが、それぞれの独立は重要と言って、各々でエネルギーをいっぱい使って、コンサルタントにいっぱいお金出してというようなことをしている。同じお城に関するエ

エネルギーがあったら、それをこう1つにまとめたら、いろんな意見があるのは全然構わないと思うが、別々ではなく、その意見はまとめようと、幹部の方々がそういう意識があれば、それでいいと思う。

大島委員：おっしゃられる心配も分からなくもなく、私も40年やってる中で、最近本当に個別細分化進んで、各所管でいろんなこういう集まりをやっている。その昔は、もうちょっとその部を超えても色々話が聞こえてきたが、最近は、なかなかそういうものがない。人によっては、情報収集上手な人はいる。昔みたいな、飲み会の中でこういう話があったよみたいなのが最近はない、そういうことを感じる。ただ、やはりあの最後の最後というところでは、国の指定史跡とていう縛りが非常に重いので、そういうわけでは、我々の方の所管を通らないで事が進んじゃうと、かえって行政として何かかなりもするわけですし、そこを十分に使ってっていうところでしょうかね。課長も言われたように、そう簡単に介入はできないんだけど、色々そういったところで、他のところも認識を持ってもらって、なるべく情報くださいなということは努めていく。

辻村委員：ぜひお願いしたい。

櫻井委員：これがいい事例なのか分からないが、ゼロカーボン・デジタルタウン推進課がある。ゼロカーボンは環境部の方でやっていて、そもそも木造建築の推進の方もどちらかというところと脱炭素ということでやっている。そっちはそっちで、多分、デジタルというのは、ミナカでも色々デジタル関係のことをやっていて、今回の新しいタウンの取組は、違う2つのものを融合させてやろうということで、そこに推進課ができてと思う。すごく端的に言うと、この小田原城の天守閣も色々やってる人たちがいる中で、1つ全体を統括して見れるような、そういう部署があると一番の理想であると思う。

辻村委員：うちに任せてくれと言っていただくとすごく助かる。

岡 委員：諏訪間委員が常々言っているが、やはり街づくりという話になる。そうすると、管理所管だけの話ではなくなって、街づくりとして歴史的建造物はどうするか、文化財はどう考えるかという統一の部署、部を作らないといけないのではないのかと言っているが、多分そういうところはあるとは思う。

櫻井委員：木造建築協議会は、もう1人は、後藤先生が歴まちの関連で、関連専門有識者ということで名を連ねている。

湯浅委員：歴まちはどうしても関わってくると思う。だけど、基本的に城のことは、小田原城総合管理事務所が、まさに小田原城の冠がついているところがあるので、将来像も含めて、基本的に話はすべきだと思っている。我々文化財課は当然史跡を所管しているので、小田原城総合管理事務所とは毎月定例会を持っている。当然、城は史跡だとわかってるので、史跡にあんまり抵触するようなことがあれば、文化財課が当然出ていく。そういう構造と思っている。だから、城の話をするのに小田原城総合管理事務所が呼ばれてないとするならば、それはよろしくないと思う。小田原城の議論をする

ならば、小田原城総合管理事務所長が全然そういう会議に呼ばれていないとすれば、良くないという気がする。小田原城の議論をしないならいいのだが、小田原城の議論するなら、せめてこちら側は出てないと。特にこちらは経済部ですから、波及する範囲が広い。文化財課はどちらかというところと正直言うと受け身である。市で関わるとするならば、指定文化財、新規の指定は、我々は積極的にいくところである。史跡の整備も積極的にやるが、ただそれは復元なので先ほどまで話した通り今までなかったところをしっかりと歴史的な検証をして、整備していくのが我々のスタンスである。ただ、こういうスタンスで仕事していることは市の部署の中では非常に少ない。基本的には、どんどん前に進もうと、文化財課みたいにちゃんと調査する所管は、そこまではない。まちがどうあるべきみたいな、そういうところが多分多いと思う。もちろん、やらないと言っているわけではないが、小田原城については、こちらをしっかりとということだという気はする。もし、小田原城総合管理事務所が出てないのなら、小田原城総合管理事務所は入っていた方がいいと、言ってもらえたらと思う。

櫻井委員：先ほど、この検討会議をどうするかという話があって、先ほど湯浅委員から、この検討会議をなくすのではなく、残した方がいいという話があった。ただ、会議の開催スケジュールに関しては、年度始め及び年度終わりと、あとは随時必要な時という話だった。プロジェクトをマネジメントするというような、長いことや現場などでは、やっぱり定期的に見るということのも必要だと思う。その時の定例会議は、話題があってもなくてもそこで会うということが重要だと感じている。最後に、この会議がなんとなくいろんな話が煮詰まってきている中で、この会議を存続させるということは、多分皆さん合意いただけると思う。開催頻度に関してはどのように考えていくのがよいか。

鈴木委員：開催頻度というよりも、湯浅委員も言われていたが、我々が1年やっても、結局2年かかっている。それで、この検討会議の成果として、全体のマイルストーンを、我々としては一旦書いたという検討会議としての成果報告は、市長に正式にあげるということが、年明けになされればいいと思っている。それと、全庁的に城をどうするのだというタスクフォースを立ち上げていくべきだというような答申も足して、市長に報告を上げるということが年明けに一旦できればいいと思う。それとはまた別に問題として、木造の可能性検証のための基礎調査研究は、とにかくしっかりと進めているという話は、それはまた別の話だと思っている。

櫻井委員：短いスパンで考えると、やっぱり我々1つ気になるのは、その東博模型の調査である。先ほどの話でいくと、宮本委員とかとの打ち合わせは必要ないか。

湯浅委員：宮本委員とはやった方がいいと思う。これについては、やるという方向性だ。

櫻井委員：そうすると、この会のオフィシャルな開催は、鈴木委員が言った成果をまとめて、2年間の成果という形で、市長に一旦報告書という形で提出するということをすることに対して、小田原市の方の意見がどうか。

湯浅委員：部長と相談させてほしい。それは今のタイミングで、市長には当然のことだから、こういうのやっている、こういう話をしていると事あるごとに報告している。こうしてオフィシャルに、この会としてやるべきや否かということもあると思う。ご希望があればもちろんやる。部長と相談させてほしい。マイルストーンは、自分たちで持っていないとそれ以上進めようがないので、持ってるべきだとは思いますが、最大のポイントは表に出していくべきものなのかどうかは、また違う話だと思っている。あとは、全庁的なところに、このタイミングで切り出すべきなのかどうかというところがある。この今の熟度で出すのかどうか。もちろん、この検討会議に必要とあれば、あの所管の職員と話をしてもらおうとかというのは、前からお申し上げて通り、全然問題ないと思っている。全員集めて、それではやると言って、今日の内容みたいなことだと、どうなのかと思う。居てもらっただけになるのが危惧されるところだとは思う。もう少し具体的話があって、それぞれの検討を、それぞれの所管で検討すべきことがあるという前提であれば、皆さん来ていただいてというのがあると思う。そこは少し個人的に気になると思う。

鈴木委員：いま課長が言われたように、我々はそこが気になっている。どの部署に何を検討してもらおうというところまで、そこまできちっとその中に盛り込んでおくべきと思っている。

湯浅委員：会議で、年に1回委員が集まり、今度はどうするかという会議が、ないわけではない。そういう会議は、年1回ぐらいである。歴まちも、一応庁内の検討会議は、基本的には年に1回程度で、書面会議もあるが、膨大な資料が送られてきて、訂正、修正しろというものだ。そのために、一応、委員の方がは、皆さん承知してほしいという会議である。そういうのは、市役所内でもよくある。その手のタイプは、大体書面でやっている。今はこういうご時世なので、書面でできることは書面でやろうという感じである。

櫻井委員：そうすると、湯浅委員が部長と相談するという話を受けて、どういう話になるかというところで、次の開催時期が決まってくるということになると思う。だから、それを聞かずして、決めるのもどうかと思う。

鈴木委員：それはそうだが、我々としては、課題とかマイルストーンとか、今まで何回も書き直してきてるから、ブラッシュアップ作業は、やっていきたい。

湯浅委員：どんなものを市長に提出するというものがないことには、こういお話があったというのは、今日話できるが、見せるものがないと部長も判断が多分できないと思う。市長の所に持っていくことになれば、そういったことになると思う。今日の話はこうだったという話はするが、多分、部長から返ってくる答えはそういう答えだろうと思う。

鈴木委員：大体イメージとしては、もう少し肉付けをしたものだと思う。

櫻井委員：そうすると、我々の会としても作業を年内にやって、年内には湯浅委員に渡して、部長に聞いてもらえたらとう感じになるか。

湯浅委員：そうだと思う。市長に報告したいというのなら、そこは慎重にやらなければいけないと思う。

櫻井委員：市長には報告した方がいいと思う。それでは、書類ベースで我々が作業したものを湯浅委員に送って、湯浅委員が、部長に確認してもらって回答いただくと流れかと思う。それで、回答をもらった段階で、1回開催する流れか。

湯浅委員：そんな感じでいいと思う。

鈴木委員：11月いっぱいか、多くても12月上旬に湯浅委員に渡すことを目指し、我々は頑張ります。

櫻井委員：我々の方がボールを受け取ったという形で投げるので、お願いしたい。これで終わりにする。